



◆ アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソノコ(=お便り)形式のエッセイです。
◆



今月のテーマ

チフ(舟)

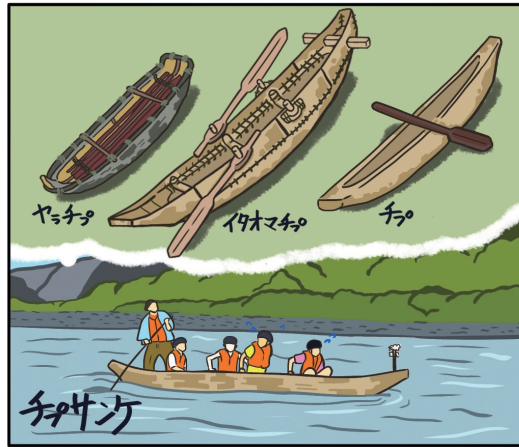
本田優子(札幌大学教授)



ア

アイヌ語で舟のことはチフ。今のように道路が整備されていなかった時代は、水路が人々の移動や物資の運搬の要。舟は現在の自動車のようになくしてはならないものでした。チフはランコ(カッタ)やアユシニ(ハリギリ/センノキ)、ピンニ(ヤチャタモ)などの大木で作られることが多かったけど、地域や用途によって様々な樹種が使われたみたい。現存する舟や文献記録からは二十種類近く確認されています。また、丸木舟だけじゃなくヤラチフという樹皮で作った軽い舟も使われました。

海で魚を捕ったり、遠くへ交易に出かけたりする時に使われたのが、イタオマチフ(板とじ舟)。波が入らないように、丸木舟に板を取り付けて舟縁を高くしてあるんだけど、釘を使わず、なんと板に穴を開けて縄でとじ付けるのです。もちろん板と舟の隙間や縄を通した穴から水が入らないように、しっかりとコケが詰められているもの、そんな貧弱な舟で大海原にこぎ出して大丈夫?って思われるかもしれませんがね。でも、耐震構造のビルの場合、大きな力を分散するには「しなる」ことが大切だって言われるでしょ。同じよう



イラスト/山丸ケニ

に舟も、バーンって大波がぶつかって来ても縄で綴じてあることで柔らかくにしなり、かえって破壊されないんですって。かつてのアイヌ民族は、このイタオマチフを自在に操って本州や大陸にまで渡り、アクティブな交易活動を展開していたのです。

近年、アイヌ文化復興のシンボルとして、道内各地で新たな舟が造られ、そこに魂を入れるとともに川の神に安全を祈願する進水儀式「チフサンケ(舟おろし)」が行われています。一方、平取町二風谷では、年中行事としてのチフサンケが一九七二年、ちょうど五十年前に創設されました。伝統儀礼の伝承とアイヌ文化を核とした地域の活性化を目的とし、なんといつてもお楽しみは儀式の後の丸木舟での川下り。例年、全国各地から集まった方々で大賑わいだけど、私自身はちょうど四十年前に初めて参加した時、舟から落ちてずぶ濡れに!忘れられない楽しい思い出です。ここ数年は新型コロナの影響で一般公開は控えてきたようですが、半世紀途絶えることなく受け継がれてきたチフサンケ。これからもずっと続きますように。



◆ 次回のテーマは「チタタプ」
村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)
が担当します。



ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

JR白老駅から徒歩約10分



ウポポイPRキャラクター
「トップボン」

- 本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
- 村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
- 山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。

